

---

# 馴浪学園      ナロウ・ガクエン

パラディンスレイヤー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馴浪学園      ナロウ・ガクエン

### 【Nコード】

N0933Z

### 【作者名】

パラディンスレイヤー

### 【あらすじ】

自信家でプライドが歪んで、頭の中がある意味ファンタジーな高校生・堀内斗<sup>ホリ ナイト</sup>。そんな彼が馴浪学園で楽しく学生ライフを送ったり、「超能力者」として色々な人と闘ったりする話。『僕はもつと評価されるべき人間でしょ？』その自惚れぶりが世界を揺るがす……なんてな！

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・サイト・小説・事件等々は、実在のものとは一切関係ありません。あしからず。

## Aさんのブログ（前書き）

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・団体・サイ  
ト・事件等々は、実在するものとは一切関係ありません。

## Aさんのブログ

皆さんこんにちは

もうすっかり冬の季節ですが、いかがお過ごしでしょうか

私の方はいいますと、クリスマスや年末に近づくにつれて忙しさが増していくばかりです

部屋の整理整頓から大掃除などなど

ですが学校の場合、もっとごたごたとしています

それも私の同級生の「H」のせいで

思い出すだけで何だかムカムカしてきたので、今から「H」の愚痴をこぼします

だから閲覧要注意です

彼と同じクラスになってから随分と経つのですが、未だに馴れません

彼は顔はそこそこ、まあまあな身長、成績は優秀でスポーツも卒なくこなせる優等生

一見すればクラスの人気者フラグが立ちそうなのですが、実は陰で嫌われています

ひがみ？

いえいえ、そんなんじゃないありません

自分が優等生であるのをいいことに、偉そうに上から目線で他人をこき下ろしたりするんですよ！

痛々しいほどに自信家なんです

しかも彼は「miccetty」ミクッティで自分を崇める信者を集めて上に立つとしてるんです！

ちよつとでも気に入らない、不都合な人間に対しては、誰彼構わず攻撃します

馴れ合う仲間や信者以外の意見は受け付けられないようです

私も違う名前で登録してるのですが、正直関わり合いたくありません  
ただ彼に表立った批判はできず、どっかのサイトで色々と不満を打ち明けてます

現に私もこうしてるくらいですし

とにかく私は彼が嫌いです

まるでこの世界の？歪み？そのものですね

彼の名は 、掘 内斗（前書き）

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・団体・サイ  
ト・事件等々は、実在するものとは一切関係ありません。

## 彼の名は、堀内斗

「やれやれ、学校が終わればいつもこれだよ。いや、人気者は辛いな。……なんてな！」

そう満足気に、さもイヤラシ気に笑う男子校生。制服のブレザーの左胸にあるエンブレムは、？互いに助け合う人々？を表しているようにも、？ただ馴れ合っているだけの様子の人々？を表しているようにも見える。

彼の周りには、いくつもの人間達が重なり合って倒れていた。

「最近の僕はリア充ならぬ『リア重』なんだよ。現実<sup>リアル</sup>が大変？重実<sup>充実</sup>？してるからね。」

悪いけど、君達に付き合うほど僕は暇じゃないよ。」

その場で唯一平然と立っているのは、その手に？稲妻の走る槍？を持つ彼の他に誰一人いなかった。そう、ここで人が何人も倒れているのは全て、彼のしわざである。

「何束<sup>なんたば</sup>になって僕に齒向<sup>なんたば</sup>かっても無駄なのに、君達は学習能力というものが無いのかい？」

彼は、自身の持ち得る力が他より優れてるからといって、勝ち誇っていた。

「僕はあくまでも僕であり、僕の生き方について何と言われようと僕は信念を曲げることはないからね？……アディオス？」

キリッ、と決めた台詞にドヤ顔。手に持っていた槍は僅かな閃光と共に消え、ルンルンな様子で彼はその場を後にする。

倒され、気を失ってる者達はただ沈黙するだけであった。

彼の名は、堀内斗<sup>ホリナイト</sup>。馴<sup>ナロウ</sup>劣<sup>ナロウ</sup>学園高等部一年の生徒だ。

これまでに彼は、要らぬ敵をたくさん作ってきた。そしてこれからも作り続けていくであろう。

いずれは世界をも敵に回すかもしれない彼の行く末とは？

彼の名は 、掘 内斗（後書き）

次回、本編始動！



## 怖い夢を見ました（前書き）

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・団体・サイ  
ト・事件等々は、実在のものとは一切関係ありません。

## 怖い夢を見ました

「どうなってるんだよ……」

濁った灰色の空。

渴いた空気と、辺り一帯に立ち込める黒い煙。

倒壊した百貨店やビルの群れ。

まばらに千切れてるモノレールの橋。

あちらこちらの地面にできた大きな裂け目やクレーター。

「マジで訳わかんないんだけど……」

廃墟となった街のスクランブル交差点に、ボロボロの制服姿の少年は立っていた。

自身がさっきまで何をしてたのかはおろか、何故ここにいるのが判らなかった。そして何故街がこのような悲惨な姿となっているのかも。

だが、これらの元凶に何故だか自分が大きく関係しているように思えた。否、思えずにはいられなかったのだ。

「そのとおりだよ掘内斗……」

「誰だ」背後から声がし、すぐ様振り向く内斗。

そこにいたのは、自身と同じくボロボロとなった制服をまとう少年であった。だが、顔は面を付けているため分からない。心の中を読まれたらしく、内斗は焦っていた。

一方相手の少年はというと、落ち着いた様子である。その面は、内斗を嘲笑<sup>あざわら</sup>うかのような表情をした醜い悪魔の顔であった。

「こうなってるのも全て僕が関わっているだと……！？ 教えろ、そして君は誰だ！」

「お前の質問に答える義理は無い」面の少年は言う。面と同様に内斗を嘲笑<sup>ちやうしょう</sup>しているのであろう、含み笑した声が漏れていた。

「何がおかしい……！」内斗が再び問う。

「答える義理は無いと言ってるだろ、同じことを何度も言わせるな」  
当然の反応であった。この少年にいくら問いかけても平行線をたどるばかりであろう。

内斗が困惑しているその時、自分達の立っている空間が突如歪み始めた。

「う……！」

内斗は目眩めまいと吐き気を覚える。息をするのも苦しくなり、まるで肺と胃が重力によって押し潰されそうな感覚だった。

あたり一帯の壊れた建物や地面から色彩が抜けてモノクロに変わる一方、空が赤く染まる。美しい夕日とは違う、気味の悪い赤だった。見上げれば、そのまま吸い込まれていきそうに感じられる。

「さあ、さっきの続きをしようか、堀内斗……、いや？聖シャイン？！」

意味深なことを口にした瞬間、面の少年は黒光りに包まれた。  
人の形をした黒い塊から何か大きな二つのものが生えた刹那、黒い稲妻が弾け飛ぶ。

「……お前は」

そこに姿を表したものを見て内斗は驚く。

赤黒く、硬そうな皮膚。

鋭く伸びた黒い爪。

肘、肩、膝、腹など所々にある刺々しい突起物。

熊にも狼にも似た頭部に、赤い眼と鋭い牙。

そして、悪魔の翼。

「お前のエセ英雄譚も今日で終わりだ……、死ね！」

異形の化け物となった少年は、空気が割れるかと思えるほどにおぞましい雄叫びを上げながら内斗めがけて突進してきた。

内斗は恐怖のあまり体が動かず、自身に秘められた雷の力を引き出せなかった。

時間がゆっくりと流れていくのを彼は感じた。ゆっくりと迫って

くる怪物。そうか、恐怖が頂点に達すると時間の流れがこうもスロースペースになるのか、と思った。一秒一秒が重い。自身の？リア重？も今日で終わりかと。気がつくとすぐ目の前まで迫っていた。

「……？邪ブラック？」

両腕の爪が降り下ろされた時、内斗は無意識のうちに呟いていた。

「起きなさい、堀くん」

「はひ？」

目を覚ました内斗が突つ伏していた机から顔を上げると、そこはいつも通りの変わらない授業の風景があつた。

周りを見渡すと、くすくすと笑い声やらぶつぶつと悪口を呟く声やらが聞こえる。

見上げれば、そこにはかんかんとなつた美人女教師の顔が。

「あなた、自分が勉強できるからって、この間も授業サボって提出物も出さなかつたでしょう！？」

ただでさえ授業態度が悪いのに、これ以上評価を落としてどうするんですか！」

「……真黒先生、そんなに怒ってるとしわが増えますよ」

「なっ！？」

「きつと婚期だつて逃しますよ」

その時だつた。内斗の左頬が硬い何かを捉えたのは。そして無意識なうちに彼は廊下側を向いていた。つまり、寝ぼけてたあまり挑発してしまった内斗は、かつとなつた真黒の右拳を受けたのだ。

「あ、れ？」

クラス中の空気が静まり、我にかえる真黒。

「あ、あはは、あはは……、ごめんなさい？ 目を覚まさせてあげようとしたら、つい力がはいっちゃって……」

無理やり作り笑いをしながら、教壇へ彼女は戻つた。

「という訳で、この問題は……」

真黒が授業を再開させる一方、いきなり殴られて不快に感じてい

る内斗は恨めしそうな目をしていた。

「……絶対いつか、弱みをたくさん握って僕の奴隷にしてやる」  
彼から発する黒いオーラに、周りの席に座るクラスメイト達は引いていた。

帰り道、内斗は色々と考え事をしていた。

授業中に見た夢は一体何だったのか。そして、あの真黒をどのよう<sup>はるか</sup>に辱しめてやろうかと。とりあえず家帰ったら、まずは「mic  
t t y」で信者となってくれてる奴らと戯れてやるか。

そう思いながら今日も一人で帰る内斗。その後を付けている影に気づくこともなかった。

【T o b e c o n t i n e w e d . . .】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0933z/>

---

馴浪学園      ナロウ・ガクエン

2011年12月5日23時08分発行